

<研究ノート>

ファミリー・サポート・センター会員が抱える不安について

－ 依頼会員と援助会員の交流会から －

About family support center member's anxiety

若佐 美奈子¹

要 旨

本稿では、ファミリー・サポート・センターの依頼会員と援助会員の交流会で行われたKJ法に類した分類法を使った意見交換を通じて、両者の不安の実態を明らかにし、活動に関する両者の思いの相違点について考察した。

依頼会員は、「援助会員に迷惑をかける」ことに関して不安が強いが、子どもが好きだけでなく育児中の親も積極的に支援したいという動機付けの援助会員にとっては、依頼会員が懸念していた事柄は全く問題がないことであった。一方、援助会員は、依頼会員との価値観の違いやコミュニケーション、依頼会員の親子関係やしつけにどこまで介入すればよいかについて戸惑うことが分かった。さらに、こうした双方の不安について積極的に意見交換することが、今後のファミサポ活動を促進するだろうと考察された。

キーワード：ファミリー・サポート・センター, KJ法, 不安, 子育て支援
family support center, KJ-method, anxiety, child-raising assistance

1. はじめに

核家族社会における子育てのストレスは非常に高く、近年、虐待問題を含めた子育て支援に、社会の関心が集まっている。

2010年1月、政府が策定した「子ども・子育てビジョン」では、「社会全体で子育てを支える」「希望がかなえられる」という2つの基本的な考え方にに基づき、目指すべき社会への政策4本柱が立てられている。

1「子どもの育ちを支え、若者が安心して成長できる社会へ」、2「妊娠、出産、子育てへの希望が実現できる社会へ」、3「多様なネットワークで子育て力のある地域社会へ」、4「男性も女性も仕事と生活が調和する社会へ」である。

そして3つ目の柱には「子育て支援の拠点やネットワークの充実が図られるように」という施策があり、具体的に「ファミリー・サポート・センター（以下、ファミサポと略記）の普及促進」などが挙げられている。目標値としては、2010年に全国570市町村にあったファミサポ事業を、2014年に950市町村に増やすことが掲げられている。

このファミサポ事業は、1994年に旧労働省の補助金事業として発足したもので、子育て中の親と同じ市町

村に住む有償ボランティアが、子どもを預かる等の活動を通して、親たちの多様なニーズに答え、安心して地域で子育てできるよう、継続的に支援するという取り組みである。

育児の援助を受けたい人（依頼会員などと呼ばれる）と育児の援助を行いたい人（援助会員や提供会員などと呼ばれる）は、ファミサポのアドバイザーを通じてペアを組み、育児サービスの授受を行う。具体的な活動内容としては、保育園への送迎や、休日・夜間の預かり、食事の提供などがあり、基本的に、援助会員宅で子どもを預かる形になっている。なお、依頼も援助も行うという「両方会員」もある。

ファミサポ活動は、有償とはいえ、営利目的でもなく、公的機関主導でもなく、あくまでも地域の住民の善意や互助精神によって支えられているという特徴をもっており、近年、新しい可能性を秘めたサービスとして、期待が高まっている。

しかし、会員登録したにもかかわらず、漠然とした不安があつて実際の利用に至らないケースも多い。現場からは、援助会員、依頼会員それぞれに、活動に対するさまざまな不安があるために、十分活動できなかつたり、ファミサポ活動を通して広がるはずの人間関係が、逆にストレスの原因になつたりしてしまうケー

スもあると聞く。

これまでファミサポに関する研究は、活動の現状や動機づけについてのものが殆どであり、会員たちが抱える不安についての本格的な研究はなかった。そこで本稿では、ファミサポ会員それぞれの立場の不安を明らかにし、それぞれの意識の差を考察していきたい。

今回のデータは、筆者が講習会講師としてかかわり続けているA市のファミサポの、「ファミサポってなあに？～たがやそう！子育ての心～」と題した交流会で、集めたものである。

A市は子育て支援に積極的な取り組みを行っている大阪近郊の都市である。A市ファミサポは1998年に市の独自事業としてセンターを開設し、社会福祉協議会が運営している。2011年4月現在、会員数は約1000名、アドバイザーは2名である。年に数回、会員向けの講習会や交流会を催し、ファミサポ活動を充実・拡充させる試みを続けている。

2. 交流会概要

2-1. 対象者

A市広報やA市社会福祉協議会のホームページの告知、ファミサポのアドバイザーの呼びかけによって集まったファミサポ会員。依頼会員4名（平均年齢38.3歳）、援助会員6名（平均年齢48.1歳）、両方会員5名（36.8歳）。いずれも女性である。

依頼会員チーム1つ（4名）、援助会員チーム2つ（5名、6名）に分かれてもらった。両方会員は、援助会員のチームに入り、援助する側として意見を出してもらった。ほとんどが初対面の顔ぶれであった。また、依頼会員チームには会員登録したもののファミサポを利用したことがない母親もいた。

2-2. 交流会の目的

ファミサポ利用者それぞれの立場の不安を明らかにして分類すること、依頼会員と援助会員双方が有意義な交流の場をもつことを目的としていた。

ファミサポ活動で持っている不安について、「人にどう思われるか」とらわれず、思いつくまま、ありのままに正直に書き出してもらうこと、そうした不安を同じ立場や異なる立場の人と共有し話題にすることを求めた。乳幼児を連れて参加した会員も多く、セミナー会場および隣室にて一時保育が行われ、子ども達が母親を求めて駆け寄る姿も多々見られるという雰囲気の中行われた。そのため、厳密なKJ法ではなく、

KJ法に類する形式で意見をとりまとめることにした。筆者は、この交流会で厳密な分類よりもグループ・カウンセリング的効果を尊重し、ファシリテーターとして、各チームの中での交流を促進し、より率直な意見交換がなされるよう配慮し、全体をまとめるよう努めた。

2-3. 交流会でのKJ法の手続き

- ①各々がファミサポ活動で抱えている不安を付箋にできるだけたくさん書き出す（1人10個以上を目標に）
- ②チーム内で、各々の付箋をつきあわせ、理解しあう
- ③付箋の似たもの同士をくっつけて模造紙に貼り、それらをまとめたものに上位概念として名前をつける
- ④③でできたグループを、似たもの同士でまとめて貼り、さらに上位概念として名前をつける
- ⑤チームで作り上げた④を、会場前方に貼り、全員の前で筆者が読み上げる
- ⑥フロアの各々が付箋に書かれたそれぞれ気持ちについて自由に質問したり、意見を言ったりする。適宜、別の立場のチームからのフィードバックを求める
- ⑦⑤と⑥のプロセスを、すべてのチームの模造紙について行う

こうした手続きの繰り返して交流会は終了し、最後に参加者に感想を書いてもらった。結果内容を論文で公開することについては、後日、全員の参加者に許可を戴いた。

3. 結果

上記のように、今回の交流会は、時間の制約もあり、会員同士の不安を十分に出してもらうことや、それを会員間で共有することを優先した。そこで、今回得られたデータは、筆者が本研究のために改めて分類しなおした。そのため、この結果は、交流会での分類と若干異なっている。

筆者は、活動に関する不安が書かれたすべての付箋にナンバリングをし、改めて類似の内容のものをまとめていった。その結果の内容を、臨床心理士の資格をもつ研究者に吟味してもらい、妥当であろうと判断された。

3-1. 依頼会員の不安

上記の手続きで、類似の内容をまとめていくと、表1のようになった。

表1. 依頼会員の不安

(A) 援助会員に 迷惑をかける	子どもが迷惑をかける	1	色んな迷惑をかけていないか
		2	子どもが迷惑をかけていないか
		3	ずっと泣き止まず迷惑をかけていないか
	病気のことで援助会員に迷惑をかける	4	風邪気味のとき、うつしちゃったらつらいな。
		7	風邪気味だったけど、援助者は気にしないだろうか
	複数の子どもを頼むのは迷惑か	15	2歳と0歳、二人同時に預けても負担にならないか
		16	二人まとめて預かってもらうのは迷惑じゃないかな (大変じゃないかな)
		17	上の子ども預けたいが人数が多くなって負担にならないか?
	援助会員宅の器物損壊	18	援助者の家のものを触っていたずらしたりしないか?
		19	家のものを壊してしまったらどうしよう
		20	よく吐くので汚してしまわないか
		21	大事なものを壊したりしていないか (お雛様など)
		22	壁に落書きしてしまったらどうしよう
	援助会員宅の子どもに悪い影響が出ないか	23	援助者の子どもにケガをさせてしまったらどうしよう?
32		援助者の子どもと仲良くできなかったらどうしよう	
援助会員の体調への気遣い	11	援助者の体調が悪くなったらどうしよう	
物品の不足	12	オムツ、ミルク、着替えが足らなくなったらどうしよう	
	13	オムツ足りているかなあ	
	14	布団の用意は必要?	
授乳の問題	24	いつもは母乳なのでミルクを飲んでくれるか?	
	25	0歳児を預けるとき母乳のみでも大丈夫? 最初から混合にしておくべき?	
(B) 子どもが ファミサポ 活動中、 快適に過 ぎせているか	子どもの機嫌や気持ち	30	ずっと泣いていたらかわいそうだな。
		31	泣いたりぐずったりしていないか?
		28	もともとわが子は口数が少ないので、預かり中にどういう風に過ごしているのか?
		29	子どもが楽しく過ごせているかな?
	子どもの体調・ケガの心配	26	預けるとき、子どもが行くのをずっと嫌がったらどうしよう?
		8	ケガをしたり急に熱を出したりしないか
		9	子どもの体調が悪くなったらどうしよう
	援助会員宅で病気にかかる	10	子どもがケガをしたらどうしよう
		5	援助者宅にネコ・イヌがいてアレルギーが出たらどうしよう
	6	風邪など流行性のものの感染	
(C) 日程・時間 のマッチ ング	日程・時間 (援助会員の都合)	40	子どもにとって、援助者にとって、時間はちょうど良いか (長すぎないか、短すぎないか)
		48	時間を空けていただいたことについて、援助者に無理をさせていないかな?
	日程・時間 (依頼会員の都合)	41	預けたい日時に依頼時間帯などが合わない
		51	出産直後、送迎できないとき、毎回送迎を頼んでよいのか?
		44	預けたいときに援助者がいなかったら困る
		45	急に時間が延びて、援助者に用事があり、預けられなかったらどうしよう
		46	予定の時間より長くなった場合、延長してもらえるか?
47	途中で何かあって (病気など) 迎えにいけないとき、どうしたらよいか?		
49	時間通り、援助者のお宅に着いただろうか?		
(D) 依頼会員 自身に 関する 不安	預けることへの葛藤・罪悪感	36	近所に姑が住んでいるので、姑から育児放棄と思われそうで不安
		37	赤ちゃんを預けて可哀想と思われぬか
		38	仕事以外の理由で預けにくい
	頼りすぎることへの不安	50	今の援助者がおられなくなったら困るなあ
	39	援助者がいてくださることで、夫が育児に気楽になりすぎる	
援助会員に家の事情を知られることへの不安	55	預けた子どもの情報漏洩	
56	子どもから依頼家族の情報を聞き出されて、他人に話されないか?		
費用負担の心配	43	長時間や日数が増えた場合の費用	
(E) 援助会員 との関係 性・価値観 の共有	援助会員との相性	52	援助者と気が合うかどうか?
		53	援助者と自分がちょっと合わないなと思ったらどうしよう
	援助会員がどんな人か不安	54	ベビーを預かってもらうにあたり、新しい援助者に頼むことは不安 (子どもの表情から様子がわからない)
		33	異性児しか育児経験のない方に預けると不安 (子どもの遊び方や行動、考え方の違い)
	援助の範囲に関する戸惑い (しつけ・サポート内容)	27	子どもが悪いことをしたときにちゃんと叱ってくれるのか
34		どのあたりまで家族的サポートをしてもらえるのか	
35	お昼寝とかまでさせてもらえる?		

(A) 援助会員に迷惑をかける

依頼会員に特徴的だったのは、「援助会員に迷惑をかける」ことへの不安が多いことだった。「物品の不足」のような、慣れればさほど問題とならないような些細な不安から、預ける子どもの状態が不安定になるのではないか、(親から見れば)問題行動を起こすのではないか、援助会員への負担が重過ぎないか、といった人間関係性の不安まで、幅広い不安が表現された。

こうした表現の背後には、他者に子どもを預けることはそもそも相手に迷惑なことだ、という気持ちが隠れているように見える。依頼会員側には、ファミサポが相互援助活動であるという意識や、地域の子どもを地域全体で育てていくという視点は弱く、子育ては各家庭個別の営みであるという意識が強いようであった。

また、依頼会員自身が子育てに困難をおぼえている場合、そうした気持ちを援助会員に投影していることもあるように思われた。

(B) 子どもがファミサポ活動中、快適に過ごせているか

親と離れたとき、たいていの子どもは不安になるものである。このカテゴリーで表現された不安は、そうした子どもの不安や心細さを想像したことによるもの、急な体調の変化やケガなどがあった時に、自分が傍にいないと困るだろうという思いによる不安である。こうした不安は、保育所に子どもを預けるときにも起きる不安であると言えよう。

あまり知らない人に子どもを初めて預ける場合などには、身体の不調や不測の事態に際し、相手がかちんと対応してくれるのか、といった不安が最高潮に達するものと思われる。しかし、一旦預かりが継続すると、活動のたびに活動内容が報告書や口頭で伝えられるので、こうした不安は、徐々に現実的な不安に修正されるようである。また、預けられた子どもが援助会員との関係のなかで成長を見せたり、新たな面を見せたりすることも、こうした不安を和らげていく要因となるようだ。

(C) 日程・時間のマッチング

ファミサポ活動は、決まった「営業時間」があるわけではない。当初のペアリング時にだいたいの利用時間やニーズは話し合われるが、援助会員に時間を「空けてもらう」という気持ちになりやすいようである。

だから、依頼会員は「必要な時はいつでも自分の都合にあわせて利用できる」わけではなく、ここにストレスや不安を感じやすいのかもしれない。依頼会員は、ファミサポによる子育て支援が、消費サービスでないという点で、その利用法に対する戸惑いや不安を持っていると言えるだろう。

(D) 依頼会員自身に関する不安

子どもを預けることに対する、母親本人に由来する葛藤・罪悪感が表現された。差し迫った理由・正当な理由がなければ、子どもを預けることができない、という切羽詰まった思いが伝わってくる。他者からどう思われるのかを気にする人もいる。(A)と共通して、子どもを他人に預けることは、そもそも良くないことだという意識が働いていると言えるかもしれない。

また、個人情報の漏洩という現代的な不安も表現された。ご近所同士の関係であり、援助会員が保育のプロではない、という条件が、こうした不安も生みやすいということだろう。

(E) 援助会員との関係性・価値観の共有

依頼会員としては、援助会員に「お世話になる」という意識が強いものの、初めての時は、第三者の目が届かない他人の家での活動ということもあり、当然ある程度の不安は出てくるものである。それに加えて、(A)(D)に関連するが、罪悪感や自分自身の子育てを他者からどう見られるのか、批判されないか、といった不安が喚起されるかもしれない。

3-2. 援助会員の不安

援助会員の不安についてまとめると、表2のようになった。

表2. 援助会員の不安

(F) 預かっている子どもの体調、気持ちへの気遣い	預かっている子どもの病 気、体調の変化、ケガ	1	預かっている間のケガ、病気などの不安
		2	ケガをしないように・・・
		44	ケガをしないか？
		45	ケガをした時の対応
		46	小1の子どもの預かったとき、公園の遊具によじ登って落ちないか心配した
		47	安全対策の内容
		3	アレルギーのある子なので、突然の体調の変化が心配
		57	子どもの発熱
		子どもの機嫌・気持ち	19
	29		子どもは本音が出せているのかな？
	30		子どもが突然家に帰りたいと言い出したらどうするのか？
	16		次回「もうA家に行くのが嫌だ！」と言われたら残念
	33		子どもさんが自分の家で、ファミサポタイムのことをどんな風に話しているのかな
	31		子どもさんの家庭での様子を全く知らない状態で預かるので、慣れてくれるのかな、と不安だった
	32		退屈しないように・・・
	援助会員宅のペットの子 どもへの影響	37	後追いをするお子さんを預かったとき、自分がトイレに行く間
		51	飼い犬が子どもに噛み付かないか
		52	動物アレルギーのある子への配慮
		53	ペットの毛のこと
子ども同士のトラブル	54	猫アレルギーにならないか？	
	8	小型犬が2匹いるので、子どもに動物アレルギーがあつたり怖がつたりしたらどうしよう	
(G) 依頼会員との関係・コミュニケーション	依頼者に悪く思われていないか	42	自分の子どもとのトラブル
		43	子ども同士の喧嘩でケガをさせてしまったら？
		20	自分はキツそうに見られるので、怖がられたらどうしよう
	依頼者からの相談・依頼者への情報提供	22	2、3回援助して、急に援助がなくなったときなど
		55	お母さんより若い援助者は不安ではないか？
		38	依頼者からの相談をどこまで受けるか
	話し合いの仕方	39	育児情報の提供をどこまでするか
		40	病院の評判を聞かれたときの対応
		14	食費の金額の決め方
	依頼者への不満や疑問	27	依頼者さんが言いたいことを我慢していないか？
		15	こちらの思いの伝え方はあっているのかな？
		21	「??」な出来事が起きたときの自分の気持ちの整理の仕方
		24	お金を戴いているので、仕事という感じで割り切るときがあります
25		あまり顔を合わせない依頼者とのコミュニケーション	
13		子どもの将来、成長具合（上手に成長できるのかどうか？）	
(H) 家庭間の価値観の違い	食文化・しつけ・マナーの違い	26	親御さんの気持ちがよくわからないこと
		9	食に対する文化の違い
		10	行儀やしつけの価値観の違い
		49	食事のときのマナーや食べる量、好き嫌いをどの程度しつければ良いか
		34	叱り方の度合い
		35	危ないことをした時など、注意したり怒ったりした後傷ついてないか、不安
		36	家庭でのしつけの違い
	50	食事のときの注意点（保護者の考えにより避けたい食材など）	
	教育方針	23	自分の子どもと一緒にすごすとき、おやつを一緒にしたりなどなるべく同じように接するが、つつい甘くなってしまう自分に反省する
		11	20年くらい前と今とは教育観は違うのか
12		小学生のお子さんの預かり時勉強をみてあげるが、親御さんの指導方針もわからないのであまり口出し、手出ししないようにしているが、もっと希望があるのかな？	
(I) 援助会員自身に関連する不安	わが子の気持ち	28	幼いわが子はどんな反応をするのかな？
	家の器物損壊	48	家の中の物の破損
	援助者の体調	17	預かっているときに自分の体調が悪くなるかも
		18	体力はついていけるのか？
	援助者の自信のなさ	58	援助者の急なキャンセル
(J) 突発的な連絡不能事態	お迎えが困難なとき	56	育児経験の有無（援助者には子どもがいないため）
		4	両親がお迎えに来ることができないとき、どうするのか？
		5	お迎えの途中で困ったことに出会わないかどうか？
		6	突然の災難、地震などのときにどうするのか？
7	突然電話が通じなくなったりしたら？		

(F) 預かっている子どもの体調、気持ちへの気遣い
圧倒的に多かったのが、このカテゴリーであった。援助会員たちが、預かった子どもに怪我や病気のないよう、また子どもが楽しく時間を過ごせるよう、相当なエネルギーを使い、心配りをしていることがうかがえる。

援助会員はファミサポ活動を始めた理由として「子どもが好きだから」と挙げることが多い（(財)女性労働協会2003）。今回「不安」として書き出してもらったものの、「子どもが好き」ゆえに、子どもの体調や気持ちに対して、非常に強い関心を持ち、子どもと接することでやりがいや喜びを感じているだろうことが考えられた。

(G) 依頼会員との関係・コミュニケーション

次に多かったのが、依頼会員との関係に関する不安・悩みであった。依頼会員は、援助会員より若年であることが多く（女性労働協会（2003）によると、提供会員の約3割が50代で、依頼会員の約7割は30代である。今回も依頼会員の平均年齢は、援助会員より約10才若い）、ジェネレーション・ギャップやコミュニケーションのトラブルを経験する場面が少なくないという。

援助会員側には「子育てする母親」も支えてあげたいという動機付けがある（(財)女性労働協会2003）が、相手がそれを望んでいない場合もある。そのため、援助者は言いたいことをぐっと堪えていることが多いように見受けられる。それが大きなストレスや不安となっている。

(H) 家庭間の価値観の違い

(G) と関連するが、良い意味でも悪い意味でも、各家庭のしつけや価値観の違いに出会うのがファミサポ活動である。特に、食やしつけ、教育方針の問題は、かなりプライベートなことでもあり、援助会員としては、あまりに踏み込んで依頼会員やその親子関係に侵入的な態度をとってしまうことを恐れることが多いようである。しかし、実際に活動をしていれば、子どもの家の方針と完全に同じにできない場面が出てくるので、それが援助会員にとって葛藤になりやすいと考えられる。

(I) 援助会員自身に関連する不安

援助会員は、根本的に育児の専門家ではなく、一般の地域住民である。自分の生活もあり、守るべきもの

がある場合も少なくない。さらに高齢の援助会員には、自身の健康に懸念が出てきても不思議はない。そのほか、育児に関して専門知識がないことで、自信がもてない場合もあるようである。こうした問題には、ファミサポが定期的に開く講習会に参加することで対応できるかもしれない。

(J) 突発的な連絡不能事態

(I) と関連するが、援助会員には自分の生活がある。個別的な活動であるため、不測の事態に柔軟に対応できるという側面がある一方で、保護者との連絡がつかないときや、予測できない事態に陥ったとき、重大な決断が迫られる場合、誰に判断を委ねれば良いのかという不安があるのだろう。

3-3. 依頼会員と援助会員の気持ちの相違

3-1でまとめたように、依頼会員の不安は「援助会員に迷惑をかけること」が主であった。

交流会でも意見交換がなされたが、依頼会員が「迷惑をかける」と感じていることは、援助会員にしてみれば「まったく迷惑とは感じていない」「不測の事態も了解済みで援助会員をしている」「そんな不安もどんどん言ってもらったらい」という内容であった。これを聞いて、依頼会員たちに安堵の表情が広がっていったのが印象的であった。

依頼会員には、援助会員を始めとした地域の人々に育児で頼りたい思いがあるが、実際に頼ると深く傷ついてしまう、というヤマアラシ・ジレンマ的心理が働いているように思われる。「預けることへの葛藤・罪悪感」にも見られるように、登録したにもかかわらず、実際の利用をためらう会員は、預ける行為それ自体を否定的に捉えているために、預けると、第三者から自分の育児への評価が突き付けられるのではないかという不安を持っているのかもしれない。

筆者には、これは深刻な溝であるように思われる。山下（2004）は、育児支援者の動機付けのなかで、「支援者自身の子育ての経験」に裏打ちされたものを挙げている。「自分自身が子育てをする時、夫が単身赴任のような仕事で親もいなかったもので、ちょっと見てくれる人がいたらと思ひながらきました。…（中略）…そのような方々の手助けになればと思ひ、参加させて頂いています」といった気持ちである。育児経験の豊かな（場合が多い）援助会員は、「育児には他者の助けが必要である」ことを身にしみて体験しているが、現役の母親たちは自分の力で必死に子どもを

育てようとしており、他者の援助を受けるのは、かなり敷居の高いことだと認知しているようなのである。

こうした認識の相違は、依頼会員・援助会員双方がもっていた、関係性や価値観についての不安や問題意識にもつながるだろう。

井上(2004)は、援助会員(井上の論文中では提供会員という名で呼ばれている)へのインタビューから、子育て援助に至った要因の分析を行い、①ケア役割を通じた社会参加(性別役割分業観に基づき、主婦から逸脱しない範囲での社会参加)と②子どもへのケア(子どもが好きだからという動機があり、子どもの存在そのものに非常に肯定的な感情をもっている。良い母親としての規範を強く内面化しており、子どもと接する充足感が活動を継続させている)などの要因を挙げた。そして「ファミリー・サポート事業は、ジェンダー規範によって女性に固定化された子育てというケアワークを、女性の側に再固定化するというシステムを内包している」と述べている。この研究をふまえると、価値観・しつけの相違に関する不満や不安、戸惑いは、依頼会員と援助会員のジェンダー規範の違いと関係があるかもしれない。

また3-2でまとめたように、援助会員の不安は「子どもの体調・気持ちへの気遣い」が主であった。援助会員は、依頼会員の子育ての大変さに共感しつつも、子どもを預かるうち、子どもの気持ちに同一化しやすくなるのだろう。子どもにとって良くないと思われること、子どもが親について不満に思っていることに対して、代弁したくなったり、介入したくなったりもするのではなかろうか。そうした介入は、依頼会員にとって「子どもを預けて余計にしんどくなった」体験になる可能性がある。子どもの養育に関する責任やイニシアチブが親にあるとしても、ファミサポの特性を生かし援助会員という人的資源を生かすために、両者が活動を通して子育て観について話し合うという営みが必要なのではないだろうか。

4. 総合考察

本稿は、ファミリー・サポート・センターの依頼会員と援助会員の交流会で行われたKJ法に類した分類法による意見交換を通じて、両者の不安の実態を明らかにし、活動に関する両者の思いの相違点について考察することを目的としていた。

ファミサポ活動を通して、依頼会員と援助会員は、営利目的ではなく、公的機関サービスでもない、新た

な人間関係を築くことになる。核家族社会では、育児に対する母親の負担が大きく、密室の育児と言われることが多い。そうした緊密な母子関係のなかに、地域という第三者が入るといった構図が生まれるわけである。

しかし、依頼会員にとっては、自分個人の子育てについて援助してもらおうという意識が強いためか、援助会員に「迷惑をかける」ことに関して不安が強い。一方、子どもが好きだけでなく育児中の親も積極的に支援したいという動機付けの援助会員は、そうした問題は迷惑と意識していなかった。むしろ援助会員は、依頼会員との価値観やコミュニケーションの違い、依頼会員の親子関係やしつけにどこまで介入すればよいかについて戸惑っていた。こうした気持ちのズレは、ファミサポ活動に対する動機付けがそれぞれ異なっていることに端を発している。そこで、ファミサポの特性を生かし援助会員という人的資源を生かすために、両者が活動を通して子育て観について話し合うという営みが必要なのではないだろうか、と提言した。

次に、受講者アンケートを通して、交流会の意義について述べたい。アンケートでは、ほぼ全員が交流会について高い評価をしていた。「同じ立場の仲間ができた、経験を分かち合えた」に代表されるように、共通の立場の仲間と意見交換することの意義を発見したものであったり、「異なる立場の気持ちが多かった」のように、相手の本音を知ることができたことの発見であったりした。また「お互いに遠慮しているところがたくさんあることが分かった」「信頼関係をいかに築くかが課題だなと感じました」というものもあった。

今回、援助会員、依頼会員に個別に調査するのではなく、それぞれの不安を出し合い、共有する場をもったことで、お互いの理解がより進んだように思われる。今後、地域で子育てをどのように支援していくのか、といった視点で、援助会員と依頼会員双方が出席できる交流会を続けていく必要性は非常に高いように思われる。

核家族化した社会で子どもを育てるにあたって、別の価値観や子ども観に触れることは、勇気がいるが貴重な体験であると言える。ベビーシッターなどのサービスとファミサポの根本的な相違は、こういった人と人との、やや「ややこしい」が人情あふれるつながりであると言えるのではないだろうか。そして、こうした関係性を地域で育てていくためには、ファミサポが積極的に会員同士の交流、さらに進んで地域の育児支

援に関心のある人々同士の交流を意識したイベントを続けていくことが重要であろうと思う。

また、これまでのファミサポ研究では、活動する大人たちに関するデータや考察が主で、預けられる子どもたちへの影響について論じられることは殆どなかった。しかし筆者は、今回の交流会を通じて、大人たちが地域の人と子どもたちの養育のあり方について考える機会を得たことで、お互い非常に有益な体験をしたように見受けられたのが印象的であった。多様な価値観や文化の違いの触れること、大人同士の相互援助のありようを目の当たりにすることで、きっと子どもたちは、当たり前と思っていた自分の環境を見直すことができるだろう。さらに、多くの人に見守られて成長すること、親が社会にどうつながっているのかを考えることも、きっと良い影響を及ぼすことだろう。何より、自分たちの未来について真剣に考えてくれる人たちがいる、という体験は、多いに越したことはない。しかし、これについてはまだデータがないので、筆者の想像の域を超えない。今後、子どもたちのファミサポ経験についても調査する機会があればと思う。

本研究は、千里金蘭大学地域共創センター地域連携事業の1つとして行われた研究である。

謝 辞

本研究を行うにあたり、ご協力くださったA市ファミサポ会員で交流会に参加された皆様、アドバイザーの皆様、関係者の方々に深く感謝いたします。

文 献

- 井上清美 2004 子育てを支援する人々の意識とジェンダー 家族研究年報 (29) 69-85
- 岡本かおり 2011 相互援助型子育て支援参加者の意識変化に関する研究—ファミリー・サポート・センターにおける活動を通して 応用教育心理学研究 28 (1) 43-55
- 東内瑠里子 2007 子育て・家庭教育支援における親の学習機会の再考：佐賀市・鳥栖市のファミリー・サポート・センターを事例として 研究紀要41 69-76
- 山本真実他 2002 在宅保育に関する研究Ⅴ：ファミリー・サポート・センター事業を中心に 日本保育学会大会研究論文集 (55) 216-217

山下亜紀子 2004 育児支援者の動機付けに見る地域型育児支援の展望 国立女性教育会館研究紀要 (8) 39-50

(財)女性労働協会 2003 平成14年度ファミリー・サポート・センター活動状況調査報告結果報告書 (<http://www.jaaww.or.jp/pdf/family/news/20040213.pdf>)